

老年学の父、ロバート・N・バトラー ILC 米国センター理事長逝去



ILC 米国センター理事長ロバート・バトラー博士が 2010 年 7 月 4 日 22 時 30 分（米国東部時間）、急性白血病によりニューヨークのマウントサイナイ病院にて逝去しました。享年 83 歳。

「いつまでも働いていたい」と 2010 年 6 月の TIME 誌インタビューにも答えていた通り、2010 年には母校コロンビア大学の教授に就任し、亡くなる 3 日前まで元気に執務されていたバトラー博士。

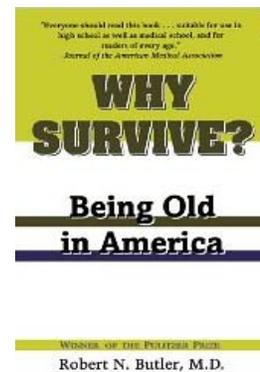
2005 年に仕事上のパートナーでもあった妻の Dr. Myrna I. Lewis を亡くした大きな悲しみから漸く立ち直り、精力的な活動を展開していた中での突然の悲報でした。日本食を愛し、週末のセントラルパークでのウォーキング・クラブにも欠かさず参加し、周囲の誰もがまだまだこれからの彼の活躍を信じていました。

世界各国がそれぞれに高齢社会の現実と直面し、その課題が人類共通のものとなった今、世界はまさにバトラー博士の知恵と見識を求めていたのでした。

バトラー博士は「老年学の父」「パイオニア」と呼ばれ、米国だけでなく、世界中の人々の高齢者に対する意識改革に多大な影響を与えてきました。「20 世紀に人類の寿命は 30 年延びた。この事実を陰鬱、悲運と受け止めるのではなく、祝福、理解、称賛すべきであろう。」として、高齢者を「お荷物」「役に立たない」「老いぼれ」とする偏見をなくすこと、高齢者も若者と同じぐらい生産力があり、社会への積極的な参加が可能で、柔軟な思考を持ち、そして愉快的な人達であることを、繰り返し訴えてきました。

1953年コロンビア大学医学部を卒業後、精神科医の道を歩み始めました。彼自身の幼年期の体験から高齢者の専門家として経歴をスタートさせ、1961年には治療法としての「回想法」を創始。この画期的な治療法は、現在は世界中で認知症治療の一つとして定着しています。1968年には「Ageism」という新語を創り、年齢差別撤廃に精力的に取り組むとともに、1982年からは”Productive Aging”の理念を打ち出し、「高齢者を社会の弱者として差別や偏見の対象とするのではなく、すべての人が老いてこそますます社会にとって必要な存在であり続けること」を一貫して主張してきました。

1976年には著書”Why Survive? : Being Old in America”でピューリッツァ賞を受賞。この優れた著書は老年学を学ぶ者にとってのバイブルで、今読み返してもその見識と先見性には圧倒されます。妻の Myrna I. Lewis と共著の”Love and Sex after Sixty”は、特にベビーブーマー世代の関心を集めてベストセラーとなりました。



バトラー博士は、1990年のILC創設時から20年にわたり米国センター理事長として、また2009年からはグローバル・アライアンスの共同理事長としてリーダーシップを発揮してきました。

1987年、朝日新聞主催の国際シンポジウム「高齢化社会を考える」にパネリストとして来日したバトラー博士が、森岡茂夫 ILC 日本顧問（当時山之内製薬社長）と出会ったことから、高齢問題の国際プロジェクト構想についての積極的な意見交換がなされました。その後厚生省（当時）の全面的指導のもと、3年の準備期間を経て1990年に日米二ヶ国にILCが設立され、高齢問題への国際的、学際的な調査・研究、啓発・広報に関する壮大なプロジェクトがスタートしたのでした。



1991年 日米合同委員会（NYマウントサイナイ医科大学）

左から2人目：森岡 ILC 日本顧問、中央：バトラー博士、右から2人目：伊部初代 ILC 日本センター理事長

当時 63 歳のバトラー博士は、米国内においては National Institute on Aging(国立加齢研究所) 設立所長を務め、その後マウントサイナイ医科大学初代老年医学部長に就任、米国内の様々な高齢関連団体の設立に奔走しその活動を軌道に乗せて、高齢問題の分野においては既に巨大な存在でありました。

国際的には 1982 年に国連が開催した「第 1 回国連高齢化に関する世界会議」で議長を務め、その 1 年後に開催されたザルツブルグセミナーにおける彼のスピーチは既に伝説となっていました。ILC 設立後は国内外ともますます精力的な活動を展開し、1995 年にはクリントン大統領(当時) が主宰する「高齢化に関するホワイトハウス会議」の諮問委員会委員長に任命され、以降第 4 回までの全ての会議において重要な役割を果たしました。また 2002 年の「第 2 回国連高齢化に関する世界会議」においては「高齢者の人権宣言」を提出し、世界 160 カ国の代表者に承認され、最終報告における骨子を成すものとなりました。

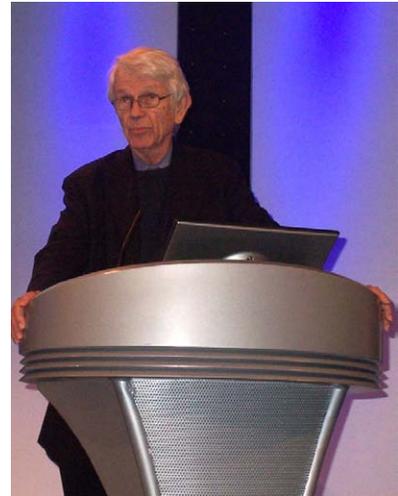
そのような活動に対して、2003 年には米国の高齢者の人権とニーズの向上および QOL の改善に貢献したとして、第 10 回ハインツ賞 (Human Condition 部門) を受賞、2004 年コロンビア大学 250 周年記念「偉大なコロンビア大学出身者 250 人」

の 1 人に選出されるなど、その業績の偉大さにおいて突出した存在であり続けました。

執筆活動においても勢いは全く衰えることなく、2008 年には 600 ページを超える大作、「Longevity Revolution」、2010 年 5 月には「Longevity Prescription」を刊行したばかりでした。

その間 ILC 加盟国は 12 カ国に増え、ILC グローバル・アライアンスとして共同事業を展開しています。

「高齢社会における人権」「健康長寿と経済発展」「高齢社会における女性の地位と役割」「長寿時代の社会参加」などのテーマでの国際会議でのシンポジウムの開催や、加盟各国における課題の抽出とその解決法への取り組みに足並みを揃えるなど、ILC は研究と実践の団体として他にはないユニークな活動を行ってきました。



これら全ては、リーダーであったバトラー博士が常に先見の明をもち、高齢社会を地球規模で捉える大きな視野を持っていたからこそ、成し遂げられた成果であると確信しています。

プロダクティブ・エイジングを自身の生き方をもって体現したロバート・バトラー博士。私たち日本センターは、ILC グローバル・アライアンスの各国メンバーとともに、バトラー博士の遺志を継いで高齢者の人権とプロダクティブ・エイジングの実現に向け、さらなる活動を続けてまいります。

バトラー博士のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(なお追悼式は 2010 年 9 月 29 日(水) 16 時より、All Soul's Unitarian Church(NY)にて行われました)

関連記事: **NY Times** <http://www.nytimes.com/2010/07/07/health/research/07butler.html>

TIME <http://www.time.com/time/health/article/0,8599,2002134,00.html?xid=rss-topstories>